



学生数/約2100人
学部/医療福祉、現代社会、経営法、工
大学院/健康社会システム

狙い

- ▶ 多様な学生が協力しながら学ぶ、ラーニングコミュニティの形成
- ▶ 授業中にリーダーシップを発揮し、他の学生をサポートできる学生の獲得

高校	入試		入学前教育	大学教育
大学での学びや将来の職業への理解を深め、意欲を高める ・育成入試のゼミ、入門塾 ・高校訪問や高校生の大学の授業参加など	総合型選抜	募集人員	年内入試合格者に高校の教科学習の復習や、各学部学科の学びに応じた課題を課す 例： 理学療法専攻の場合、要約する力と、社会に対する関心を育てる狙いで新聞の要約を毎日課している	宮城ラバー、仙台ラバーを育てる全学共通教育「輝ける者Principle」 ・学科専攻ごとに能動的に学ぶ力を育てる「育みプロジェクト」 ・学部横断のチームで地域課題を探る「探求・理解プロジェクト」 の2つを通して、地域社会の発展に主体的に関わる力を育成
	育成	75人		
	自己アピール	52人		
	スポーツ	若干人		
	学校推薦型選抜	募集人員		
	一般	111人		
指定校	170人			
一般選抜	募集人員			
一般選抜入試	176人			
共通テスト利用入試	14人+若干人			

注目!

具体的な就業イメージを醸成する
出願前の「入門塾」は高校から高評価

リハビリテーション学科理学療法専攻では、育成入試の出願前に全6回の入門塾への参加を課している。理学療法士を志すモチベーションの向上と、理学療法士の仕事の基礎を知ることが目的だ。参加者は午前中に座学の講義や映像授業を受け、午後は障(しょうがい)体験やグループワークなどの演習に取り組む。これは高校生に自分の将来を具体的にイメージさせる時間として、とても重要な意味を持つという。また、回を重ねるごとに参加者同士や教員との関係性が深まり、それが入学後の何でも相談しやすいクラスの雰囲気づくりに役立っている。

アドミッションセンターの庄司裕次郎副センター長は言う。「高校の先生方は、部活動の練習などがある中、生徒が6日間休まず受講したことにまず驚かれます。そのことで、本学の教育に対する信頼も高まっています」。リハビリテーション学科で実施している入門塾の効果がはつきり出てくれば、他学科にも今後広げていきたい考えだ。

「理学療法学入門塾のテーマ」

- 第1講「理学療法士のイメージを共有する・入塾の目標を定める」
- 第2講「理学療法から身体を捉える」
- 第3講「動きを科学する」
- 第4講「運動ができなくなるということ」
- 第5講「理学療法の世界に飛び込む」
- 第6講「理学療法士という仕事」



東北文化学園大学

CASE STUDY

育成型の総合型選抜で
学びをリードする学生を獲得

2021年の学部学科の再編を機に、学習意欲等を総合的に評価する「育成入試」をスタートさせた東北文化学園大学。新入試の狙いと今後の展望について聞く。



医療福祉学部長・アドミッションセンター長

藤澤 宏幸

ふじさわひろゆき ● 1988年北海道大学医療技術短期大学理学療法学科卒業。1999年室蘭工業大学大学院生産情報システム専攻修了。1999年東北文化学園大学医療福祉学部助教、2006年教授。2020年より現職。博士(工学)。

入学前から学びへの意欲をかきたてる入試

本学は2021年度入試より、全学部の総合型選抜で「育成入試」を実施しています。これは、志望する学部学科の学びに応じたゼミや、理学療法士・作業療法士等の仕事に関する「入門塾」(模擬授業)を受験生が受講したうえで出願し、その内容をふまえた試験で選抜を行うものです。

それまで育成入試は、一部の学部でのみ実施していました。それを全学部に拡大した理由は、IRの分析で、入学時の学力よりも「この学問を学ぶ」という強い意志が、入学後の成長に関係していることがわかったからです。つまり、本学においては強い意志の下、1年次前期に学習習慣を確立し、スタートダッシュに成功した学生が伸びる学生なのです。そうであれば、高

学生募集で重要なのは
高大の学びの接続

導入初年度、理学療法専攻の育成入試では27人が入門塾に参加し、志望分野を変更した1人を除いて全員が出願。最終的に出願者全員が本学に入学しました。入門塾に参加した高校生の生き生きとした姿を見て、教員側も高大接続

校時代は課外活動などに力を入れた一方で基礎学力が不足する受験生であったも、本学で学ぶ目的が明確であれば入学後に伸ばすことができる。そう考えて拡大を決めました。

の重要性をあらためて実感しています。

18歳人口の減少が進む中、本学が生き残るためには、「偏差値で本学を選ぶ学生」ではなく、「本学の教育に関心がある学生」に来てもらうことが重要です。本学に関心を持ってくれた高校生一人ひとりに向き合い、教育をより深く理解してもらうことのほうが、結果的に入学者の確保につながりますし、それが本学らしい取り組みだからです。

そのため、今後は高校との学びの接続に一層力を入れていきます。本学は、2017年より、高校生が普段の大学の授業を見学する機会を設けています。コロナ禍が落ち着いたら、こうしたイベントや高校への出張講義を通して、大学でできる学びを高校生に積極的に伝えていきます。

その効果を高めるには、高校と大学をつなぐコーディネーターとしての職員の力が不可欠です。なぜなら大学の授業を体験して終わりではなく、事前ガイダンスや事後の振り返りを通じて、参加者が気付きを深めることが重要だからです。私はアドミッションオフィサーが高校生の主体的な進路選択に関わるこそが、今後の学生募集の鍵を握ると考えています。

* 工学部臨床工学科、医療福祉学部看護学科を除く

取材・文/本間学 撮影/筒井岳彦